

半世紀にわたる「問題」を、いま問い直す。

## 不登校 50年

### 証言プロジェクト

#### #39 駒崎亮太さん

学校基本調査で「学校嫌い」の統計が開始されたのは1966年。今年はそれから50年にあたります。学校を長期欠席する子どもは、学校制度とともに常にいました。しかし、現在につながる「問題」として不登校が社会現象化してきたのは、この統計開始以降とも言えます。この50年、不登校は「問題」であり続けてきました。それは、学校、教育行政、精神科医療、家族のあり方、働き方などが、さまざまに問われてきた「問題」だったと言えます。この50年は学校に行かない子どもたちにとって受難の歴史だった一方、親の会やフリースクールなどの市民運動が立ち現れてもきました。いったい「不登校50年」の歴史は何を語るのでしょうか。不登校をめぐる、時代ごとにどんな状況があり、どのように問題とされ、どう対応されてきたのでしょうか。

不登校新聞社では、「不登校50年」を機に、証言プロジェクトを開始し、不登校経験者、親、親の会、居場所・フリースクール、医者、教員、学者、弁護士など、さまざまな関係者の生の声を集め、アーカイブにしていきます。インタビュー・寄稿は、社会的意義を考え、購読者に限定したのではなく、無料で公開します。そのため、プロジェクトは、寄付によって運営します。ぜひ、このプロジェクトへのご支援・ご協力をよろしくお願いします。

2016年7月15日 全国不登校新聞社

プロジェクトチーム（統括：山下耕平）

関東チーム委員：奥地主子、木村砂織、朝倉景樹、石林正男、加藤敦也、佐藤信一、  
須永祐慈、関川ゆう子、野村芳美、藤田岳幸、前北海、増田良枝、松島裕之、山口幸子  
関西チーム委員：山下耕平、石川良子、貴戸理恵、栗田隆子、田中佑弥、山田潤

## #39 駒崎亮太さん



(こまざき・りょうた)

1944年、神奈川県鎌倉市生まれ。東京大学経済学部卒業後、会社勤めをしたものの、すぐに辞めて、高校教員に。洲本高校、茅ヶ崎高校の全日制を経て、1983年から湘南高校の通信制に（1996年まで）。通信制高校では、脱学校の思想と重ね合わせて活動していた。三吉クリニック（藤沢市）との出会いから、カフェ・ドウ・ソーじゃんという居場所にも関わる。1996年から2005年まで、茅ヶ崎高校の定時制で教員をしていた。

インタビュー日時：2018年3月21日

聞き手：栗田隆子、山下耕平

場所：磯里（神奈川県大磯町）

写真撮影：山下耕平

栗田 おひさしぶりです。私は89年から湘南高校の通信制に通っていて、当時、駒崎さんの授業も取ってました。ですから、お会いするのは30年ぶりぐらいになります。まずは、駒崎さんの子ども時代のことからうかがっていききたいと思います。お生まれは神奈川県ですよね。

駒崎 そうです。1944年、鎌倉生まれです。生まれて間もないころ、母親の実家を頼り兵庫県西宮市に移り住んで、そこで空襲に遭って、父親は焼夷弾が屋根にかぶったところをたたき落としたと言っていました。その後、長野県に疎開したんですが、僕は乳飲み子で、おふくろは乳が出ないので、代わりに杏の実を拾って、やっていたと言っていました。敗戦で、また神奈川にもどってきたんですね。

栗田 その後、お父さんは、単身ブラジルへ渡ったそうですね。

駒崎 僕が5歳のころ、起業してブラジルで一旗揚

げると言ってるね、幼い子ども3人と妻を残して行っちゃったんです。でも、いい面もあったね、父親は日本的な親の権威を持ってなかったんです。そのうえ、いなくなったものから、僕は父親の権威を知らずにのびのび育ったんですね。いつだったか「日本は自由ではないけど、君たちは自由にやりなさい」と言っていました。

昔、同僚から「あなたには男親の影がないね」と言われたこともあります。まあ、プラス・マイナス両面あるんだろうけどね。

山下 ご苦労もあったのでしょうかね。

駒崎 父親は次男だったんですが、どういうわけか、父方の祖父のめんどろを母がみることになって、家を売り払って、借家生活で、祖父といっしょに暮らすことになったんです。舅で元校長のこのじいさんが身勝手な横暴でね。

それと、僕は小学校を途中で転校してるんですが、転校後の男性教員（後年、校長に）が、暴力的・差別

的でね。そういう経験から、男性の横暴とか暴力に敏感になりましたね。それはプラス面かな。

**栗田** 転校前は、湘南学園に通われていたそうですね。湘南学園は私立学校で、何というか、のびのびしたところですね。

**駒崎** 4年生までは湘南学園に通ってました。その後、公立の御成小学校（鎌倉市）に転校したんです。そこで何が変わったかというところ、いろんな子がいたんですね。当時、戦災孤児や母子家庭で貧しい家の子のめんどろをみる施設のことを「保育園」と言ってたんですが、「保育園」から学校に通ってきている子が、クラスに4〜5人ぐらいいました。

同じクラスに、貧しい子もいれば、お金持ちの坊ちゃんもいる。金持ちの家の子は、ピアノやお絵描きや習字をしていたりね。成績もいい。そこには露骨な格差があったし、差別もあった。でも、恥ずかしいことに、当時の僕は、坊ちゃんの仲間に入りたかったんだよね。

**駒崎** 中学に入ったらね、成績の順位が貼り出されたんだよ。そうしたら最初が一番になっちゃったもんだから、「おまえ、すげえじゃないか」となってね。落ちたらいけないってプレッシャーになっちゃってね。

**山下** 1957年の入学になるわけですね。当時の公立中で、そんなことをしてたんですね。

**駒崎** 驚きだよな。いわゆる「いい中学」だったんだな。

**栗田** 御成中って、公立だけど越境で来るような中学校ですよ。そういうところでは、すでに競争的な教育を始めてたのかもしれないですね。

**駒崎** でも、子どもをゆがめるよね。僕なんかも、ゆがめられたなと思います。かといって、ガリガリ勉強していたわけではなくて、けっこう遊んでもいたんだけどね。

**栗田** ガリ勉強じゃなくて、遊んでいても成績がよくな

**栗田** 転校後の学校の暴力的な先生というのは、どういう感じだったんでしょう。

## 学校や教育への不信任感

**駒崎** S先生がひどくてね。とくに目をつけている子を何かにつけては教壇に立たせていました。工作の授業中、ウルサイと言って、子ども全員を裸足で雪の校庭に並ばせて、説教したり、バンバン殴ったこともあってね。怖いものの。その子は涙を流してました。僕も、給食のときに騒いでいて、やられたことがありました。理科の授業で回虫の話をしていただけで、その直後の給食にうどんが出てきたもんだから、5人の班で話が盛り上がって、騒いでたの。そうしたら、呼びつけられて、軍隊風に、子どもどうし相手を殴れというんだ。そういうことがあったものだから、学校とか教育には不信任が生まれましたね。

**栗田** 一方で、中学以降は優等生だったそうですね。

いとカッコ悪い、みたいな。

**駒崎** 「点取り虫」とか言ってたね、非難された。

**栗田** それも地域性もあるかもしれないですね。勉強だけじゃなくて、芸術にも長けてないといけないみたいな感じがありますものね。

**駒崎** そうね、でも僕はそういうセンスがなくてね。モチなかった。

**栗田** それも大事なところだった（笑）。当時、学校にこない子はいましたか？

**駒崎** 病気の子はいたけど、学校にこない子はいなかった気がしますね。

**山下** 家業のために来られない子というのもしなかったですか。

駒崎 いなかったと思うな。鎌倉は、子どもの静養のために東京から空気のいいところに来るような感じもあったから、そういう地域だったからかもしれないね。

栗田 私は同じ鎌倉でも腰越の出身なんです。腰越はもともと漁村で、なんかガラが悪くてね。言葉が汚いために就職差別もあったというので、「ねさよ運動」というのが、私が小学校のときでも、まだあったんです。

山下 ねさよ運動？

栗田 「それでね」「でさ」「それでよ」とか、語尾に「ねさよ」をつけないようにするってことです。先生から「汚い言葉を紙に書いて燃やせ」って言われて、私は意味がわからないから「バカ」とか書いて燃やしてたりしたんですね。でも、それは方言が汚い言葉だということだったんです。

ところで、駒崎さんは湘南高校に進学したんですね。湘南高校も階層の高い人が行く公立の進学校で、

栗田 教員になろうとしたのは、どうしてですか？

駒崎 青臭いようなんだけど、ジャーナリストか教員になろうと思っていたの。高校のときまでは、朝鮮人差別とか、部落差別とか、沖縄の問題について、ほとんど知らなかった。授業でも教えてもらってなかったところが、大学に入って、そういうことを知って、これはちゃんと伝えないといけないと思ったんだ。伝えるためには、ジャーナリストか学校の教員かだと。無知の自覚というかな。ちゃんと考えてこなかったのは教育のせいじゃないかと思ってね。

山下 教育への疑問から教員になろうとしたわけですね。大学では、どこで社会問題を知ったんでしょう。

駒崎 ゼミだとか、デモや集会ですね。ベ平連<sup>\*1</sup>のデモで街頭に出たりしてました。最初はジャーナリストになろうと思ってたんだけど、岩波書店と朝日新聞に

<sup>\*1</sup> ベトナムに平和を！市民連合。1965年、哲学者の鶴見俊輔や作家の小田実らが呼びかけて始まった、無党派の反戦運動。

たとえば石原慎太郎も湘南高校出身ですよ。

駒崎 そうだね。余談ですが、石原慎太郎と裕次郎がブラジルに行きたいといって、僕の父親のところにいったことがあるんですよ。父も旧制の湘南中学校（現在の湘南高校）だったんでね。そのツテを頼ってということだったんでしょう。父は「あいつら礼儀がなっていない」とか言って、怒ってたけどね。

## 教育への疑問から教員に

栗田 高校時代に60年安保があったんですかね。

駒崎 高校入学が60年で、安保のことは知っていたけど、僕も含めて、1年生はあまりデモに行ったりはしなかったね。後に社研（社会科学研究会）の部長になった友だちは東大に進学したんだけど、駒場の門の前で包帯を巻いてビラを配っていたのが印象に残っています。

落ちて、筑摩書房は通ったんだけど、やる気をなくしちゃってね。隣接した産業に行こうと思って、大日本印刷に就職したんです。おかげで、早くにやる決心ができた。こんな仕事は続けられないと7月ごろに決意して、翌年4月に大学にもどったんです。

山下 大学にもどったというのは？

駒崎 東大の経済学部にはいたんですが、経済学部には経営学科と経済学科があって、4年で卒業したあと、5年目は隣の科に移っていいという制度があったんです。それで、社会科の教員免許をとろうと思って、大学にもどったんです。それが、ちょうど68年のことで、東大闘争が起きていたんですね。でも、僕は闘争から逃げた。

栗田 逃げたというのは？

駒崎 東大闘争は、大学を解体しようという運動だったんですね。でも、僕は教員免許をとりたくてもどつ



## 教科書は使わない

たわけで、大学をバリエード封鎖して、解体しようという動きには目を向けず、エゴイステイックに免許をとることに集中してしまったわけです。心情的な全共闘シンパだっただけに、その負い目の気持ちはあって、そのぶん、教員になった以上は、やらなかったぶんを返さないといけないと思っただけです。逃げただけから、その「ケリ」はつけないといけない。

**栗田** なるほど。最初の赴任は淡路島（兵庫県）の洲本高校だそうですね。それは、なぜだったんでしょう。

**駒崎** 教員採用試験はあちこちの都道府県で受けたんだけど、兵庫県には親戚もいたので、受けてたんです。でも、闘争の影響があつて、肝心の教員免許が4月には出なかったんです。だから、採用試験に受かって、どこも採ってくれない。でも、淡路島の洲本高校だけが「どうせ出るんだろ。じゃあ、それまでは講師でやってくれよ」と言ってくれたんです。それで、7月から講師扱いで採用されて、9月から正教員になりました。

そういうことは言わない、教科書は使わない、指導要領にも沿わないと決めました。僕の原点です。

**栗田** 69年のことですよ。当時は、生徒もそういう感じだったんですね。

**駒崎** ありがたかったです。おかげで、その後は、そこから下がらないでいることができました。たとえば、栗田さんが湘南高校にいたころだったら、世界史の授業では原発問題しかやらないとか、日本史は明治からしかやらないとか、おもに在日朝鮮人の問題をやってたりしましたね。

**栗田** 洲本高校には、どれくらいいらっしたんですか。

**駒崎** その年度末までで、その後は茅ヶ崎高校（神奈川県）に赴任しました。

**栗田** 駒崎さんは「自分が茅ヶ崎高校を『悪く』した」

**栗田** 洲本高校で、印象深い生徒との出会いがあったそうですね。

**駒崎** Mさんという人に、「先生も、すっかり教師になっちゃったんですね」と言われたんです。彼女はとも問題意識のある人で、僕が言うことに、半ば期待していたところがあつたんでしょうね。だけど、実際の授業は、ふつうに指導要領に沿って、教科書通りにやっていた。それで、その子はずまらずに、授業中にほかの本を読んでいたんです。それで、僕がどうしてかと思って、手紙を書いたんです。そうしたら、あんなふつうの授業はつまらないという。そこで僕は、教員は教科書を離れないとか、指導要領がどうか弁解したんですよ。そうしたら、「まさか、あなたの口から、そんな言葉を聞くとは思いませんでした」と、けちんけちゃんに言われた。

それが、ものすごくショックでね。それ以来、もう、

とおっしゃってましたが、それはどういうことだったんでしょう。

**駒崎** 当時、神奈川の高校は、湘南、鎌倉、茅ヶ崎の「順番」になっていたのね。ところが70年代になると、高校生の数が増え出して、学校の増設が進むわけです。新しい高校がどんどんできて、そういう新設校は進学率を上げるために、規則をビシビシやる。一方で、茅高（茅ヶ崎高校）では、僕らが管理教育に反発する教員のグループをつくって、徹底的に抵抗していたんです。若い教員が僕らについてくれたんだよね。それで、受験教育はしない、管理教育はしないと、職員会議で抵抗していたんです。問題を起こした生徒の退学処分にも反対する。それを生徒の側も知っているから、僕らは人気の教員になってね。中学でも、自由な高校だと噂される。でも、進学率はほとんど新設校に「抜かれ」ていくわけ。それで多くの教員たちは焦るんだけど、僕らが抵抗する。僕は「裏の天皇」とか「影の校長」とか言われてました（笑）。

栗田 歴史のある高校だったのに、進学率で新設校にどんどん抜かされていったから、駒崎さんたちが「茅高を悪くした」と言われていたということですね。

駒崎 そう。茅高には70年から83年までいたんだけど、78年ごろから、どんどん「抜かれ」ていったんだよね。それで、神奈川県では、「3崎」が問題の高校だと言われるようになったんです。茅ヶ崎、三崎、川崎の「3崎」。くわえて、4崎で駒崎（笑）。それが70年代後半の話です。

## 70年代半ばの変化

山下 70年代前半までは、生徒とも共犯関係というか、人気もあって、仲間意識もあったわけですね。

駒崎 受けてたんだよね。生徒のほうも、「受験勉強なんかやりたくない」「大人に迎合したくない」とか言っていた。

駒崎 78年ごろになると、僕も教員仲間から浮いてきてね。ほかの教員が僕につかなくなつて、管理のほうに行くんだよ。それで、79年には初の校門前服装チェックが始まった。僕のクラスは猛反発して、論争したんだけどね。そのあたりから、一気に変わっていったね。

山下 佐々木賢さんも、75年にガラッと変わったとおっしゃっていました（本プロジェクトインタビュー#07参照）。

駒崎 賢さんは茅高の定時制にいたんですね。たしかに、それぐらいから変化はあったんだけど、僕の場合は、3年生を担当していて、変化が表に出ないように、ずるずる引っぱっていたのかもしれないね。78年ごろまでは、なんとか抵抗していた。定時制と全日制のちがいもあったかもしれないけどね。

栗田 75年は、専業主婦率がピークになった年なんですよ。核家族が完成した時代。その後は、パート労働の人が増えていく。

山下 でも、それが70年代半ばごろに変わっていったわけですね。そこで、何が変わっていったんでしょう。洲本高校で学生運動に共感していた生徒にしても、茅ヶ崎高校のツッパリの生徒にしても、学校に反発するという点では共通していたわけですね。

駒崎 そうだね。それまでは、ツッパッているヤツと、生徒会やっているヤツは、すごい仲良かったの。誰かが教員と対立したら、わっと立ち上がって、処分や体罰に対してみんなで守るといふ感じがあった。それが70年代前半ごろまでの雰囲気でした。僕は、自分でもうのも何だけど、両方の生徒から受けていたから。いっしょになって、学校の管理とか権力に抵抗していた。それが74〜75年ごろから、だんだん変わっていったんだよね。ツッパッている子と、生徒会をしたり進学する子とが分断して、交流がなくなっていく。

栗田 たしかに、私たちのころは分断が進んだあとでした。

山下 不登校が増え始めるのも75年からなんですよ。いろいろな意味で、節目の年なんでしょうね。

駒崎 なるほどね。ただ、僕の実感では、まだ75年では、教員の側にも抵抗力が残っていたかな。学校も、そう勝手にできなかった。ところが「茅高をよくする会」なんてのができて、卒業生の国会議員とかが中心になって動き出して、結果的には、僕は茅高から追い出されたんです。それで湘南高校の通信制に行ったんです。茅高を「よくする」というのは、つまりは進学率を上げるとか、万引きや犯罪を減らすとか、そういうことだったわけですが。

山下 駒崎さんが自分で見切りをつけて通信制に移ったのではなく、追いやられてしまったんですね。

駒崎 そうです。あのころは、通常、転勤は自分で2月ごろに希望を出すものだったんです。それが、82年12月に校長に呼び出されて「転勤しませんか」と言わ

れてね。「したくない」と言ったら、「そういうわけにはいきません、通信制に転動してください」と言うのね。教育委員会からの要請で、校長も、ぎりぎりまで抵抗したんだと思います。

あのころの通信制というのは、あちこちで問題になった教員が集まっていたんです。僕みたいに反発していた人もいれば、体罰とかで問題になったヤツもいて、クビになる代わりに通信制に来ていたような感じでした。全日制だと生徒に影響が出てしまいうような教員を送り込んでいたわけです。

## 教えられない欲求不満

山下 通信制高校は、もともと定時制以上に、働きながら学ぶ人のためにつくられた学校ですよ。

駒崎 そうですね。83年当時でも、年配の方が多くて、半分以上は若い子じゃなかったですね。

栗田 私が入ったのは89年ですけど、たった6年で、

みたいな感じだったんですよ。だんだん、そういう子たちが通信制に集まるようになったと思います。

駒崎 茅高では、外に向かって反発する子が多かったから、通信制もそうかと思ってたら、ぜんぜんちがっていたんだよね。

山下 どういうちがいを感じたんでしょう。

駒崎 教えられない欲求不満がありましたね。茅高のときは、教室に行つて僕が話しかけたら反応があつて、議論ができていた。でも、そういうことが、ぜんぜんできない。教育委員会は、通信制に異動させることで、僕と生徒との肉声での接点を奪おうとしたんだと思いました。これはショックだった。

山下 それまでも教科書を使わなかったりしていても、やっぱり教えようとしていたのが成り立たない。

駒崎 そうなんだよ。教えるというのが教育ですよ。

ものすごく変わっていたと思います。私のころは、若い子ばかりでした。年配の方もいたけど少数で、あとは20代ぐらいで、いわゆる「ワルかった」人が来てたかな。転編入で。

駒崎 この表（左）のように、82～87年の5年間で転編入が増えてるんですね。

| 年度  | 82  | 83  | 84  | 85  | 86  | 87  |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 平沼  | 71  | 79  | 58  | 101 | 103 | 148 |
| 湘南  | 80  | 92  | 118 | 153 | 220 | 227 |
| 厚木南 | 61  | 64  | 114 | 118 | 132 | 128 |
| 合計  | 212 | 217 | 288 | 371 | 452 | 503 |

82～87年度における各校の転編入生徒数の推移

「先生 教えないで 私 学びたい—通信制高校問題検討会議中間報告—」（神奈川県高等学校教職員組合通信制高校問題検討会議／1988年7月）

※ 83～86年度の合計は計算が合わないが、資料表記のママとした。

山下 倍増してますね。ほかの高校から通信制に移ってくる子が増えたわけですね。

栗田 私はある意味「先駆的」だったというのか、駒崎さんの周囲に集まっていた反教育・反学校の仲間には入れなくて、むしろ身体が学校に行かない、

でも、通信制は学ぶ場で、こちらが教えられないという感じがしたんです。でも、それがよかった。

栗田 それで、「先生、教えないで、私、学びたいの」という文章を書くことになるわけですね（『世界』1989年5月号／岩波書店）。

駒崎 「先生、教えないで、私、学びたいの」というのはね、通信制問題検討会議（通称、通問検）で、みんな考えたものです。冊子をまとめるときに題名をつけようというので。

栗田 生徒の誰かが言った言葉ではなかったんですね。教員たちの実感だったということですか。

駒崎 そうです。

山下 通信制の集まりでは、手島純<sup>\*2</sup>さんもいっしょ

\*2 神奈川県で通信制、定時制、全日制の高校で35年間、教員を務める。現在は星橋大学教授。

に活動されていたんでしょうか。

**駒崎** いっしょにやってみました。彼は厚木南高校にいてね。知り合いですか？

**山下** いえ、息子が『通信制高校を知ってるかい』（手島純／北斗出版1989）という本を読んでいて、教えてもらったんです。この本では、脱学校論と通信制高校を結びつけて書かれていて、そこに駒崎さんのお名前も出てきていましたね。

## 教育そのものを問うように

**山下** 教員として、最初に不登校というか、それまでとちがう感じで学校を休む生徒に出会ったのは、いつでしょう。

**駒崎** 茅高のとき、77年に担任していたクラスにいましたね。お母さんがシングルマザーで、小学校の教員をしている家庭でした。学校に来ないから、生徒5人

6人といっしょに遊びに行ったりしたんだけどね。誘うとニコニコしているんだけど、やっぱり来ない。「これはなんだろうな？」という感じがありましたね。その子は、よく遅刻もしてただけど、きわめつきは修学旅行に遅刻したんだよ（笑）。それで、山口県の萩まで自分で切符を買って来たんだよね。彼は、いまは中学校の教員になってます。

**山下** 教員をされているんですか。それも、おもしろいですね。先ほど、70年代半ばに雰囲気が変わったという話がありましたが、それと並行して、不登校の子が出てきたという感じはありましたでしょうか。

**駒崎** いま思えば、そうだね。でも、当時は「よくわかんねえな」という感じでした。たとえば家庭訪問に行っても、特別、家に問題があるようには思えないけど、来ないんだよね。誘うと「行きます」と言うんだけど、来ない。そのころは、まだピンと来てなかったな。ちゃんと考え始めたのは、通信制に行ってからだね。

**山下** 通信制では、そういう子とたくさん出会うようになったんですか。

**駒崎** だんだんね。80年代前半までは、学校の管理がイヤだとか、権力に反発するとか、そういう問題の延長で考えていたんだよね。管理教育が問題だと思ってたわけです。それが、だんだん教育そのものを問うようになっていったんです。80年代後半からかな。教育のあり方を、通信制の学びのあり方とあわせて考え直していったんです。

**山下** 教えることが成り立たないという感覚と、不登校の子どもと接する感覚は、通じるものがありますでしょうか。

**駒崎** そう、そうなんだよね。レポートを書いてくるなかで、「教えられないで自分で学ぶチャンスができてよかった」とか、「何も与えられなくて、教えられないなかで、学ぶことに気づいた」とか、そういう声をもらってね。そうだったのかと。「なんだよレポー

トぐらいで気づいてくれるのかよ」って思ったけど、それはうれしかったね。

**山下** それまでの自分の授業スタイルは通用しなくなったけど、通信制で、教えるのではなく子どもが学ぶことをサポートするという、新たなスタイルができてきたということですか。

**駒崎** そうですね。手がかりはレポートだけだからね。だから、こつちも一番いいものを出さなきゃと思ってました。くいづいてくれたら、しめたものでね。こちらから強制的に教え込んだり、説明することはしない。それだけに難しい。だから、僕のレポートの提出率は低かったです。クリアするのが難しいから。3割ぐらいだったかな。通常は6割ぐらいですから、投げちゃう人も多かった。でも、そこで救われたと思ってくれる人もいるから、レベルは下げたくない。カセットテープを使ったり、面接のときにいろいろ工夫したけど、やさしいものにして単位だけ「あげる」というのはイヤだったんだよね。そんなことでは、学ぶ喜び



にもならないし、生徒への侮辱でしょう。だから、あえて難しいけど、学ぶチャンスにもなるというのが方針だったかな。

栗田 保守的な先生は提出率を気にしてましたよね。一方で、変わった先生も多かったですね。O先生から満鉄のことを学んだり、先生が率先して黙々とひとりで教室を掃除したりとか（笑）。最初は「生徒」が教室を掃除しないし、生徒のなかには大人もいるものだから「掃除しろ」とか命令することもできなかったんでしょね。

## 隅の親石

栗田 脱学校的な観点は80年代後半からということでしたけど、そういう考えとは、どこで出会ったんでしょう。

駒崎 通信制の教員の集まりが発展して、全日制教員もいっしょに「生徒の学習権を実現するために学校・

栗田 ちょっとシエルトーのような雰囲気はあったなと思いますね。

山下 80年代後半ごろからの実感として、子どもたちが教育に疲れているという感じがあったんでしょうか？

駒崎 通信制に来る前の学校で、つまんねえことをたくさん浴びせられてきて、もうイヤだという人は多かったかな。レポートを通じて、「通信制に来てホッとした」とか、「生き返った」とか、「息を吹き返した」とか、どんどんそういう声が返ってきたんだよね。教育の問題は、管理教育とか学校権力だけの問題じゃないんだって、みんなから教えられました。

山下 上から教え込まれなくなることで自体が、子どもにとって大事なことだったわけですね。

駒崎 もつれた釣り糸を引っばっても、かえって絡ま

教育を見直す研究会」という研究会をやったんです。僕は勝手に「学校の軽量化を実現する研究会」と言っていましたけどね。通称、学実研。「学校を軽くしよう」がテーマでした。それと、教職員組合で『非校のメ』という冊子を出してたんです。

栗田 教職員組合がベースにあったというのも、大事なところでしょうね。いまは、そういうことも難しくなっているでしょうし……。

山下 生徒も先生も、ほかの高校から流されてきた人が多かったから、そういう雰囲気もあったんだすかね。通信制は学校のヒエラルキーから言えば底辺。だからこそ学校教育を問い直せる場でもあった。

駒崎 そうですね。聖書で言うところの隅の親石<sup>\*3</sup>ですね。

<sup>\*3</sup> 旧約聖書詩編118「家の建てる者の退けた石が、隅の親石となった、これは主の御技……」と続く。世間からうち捨てられた存在が、重要な位置を示すこととなるたとえとして使われることが多い。

るじゃない。ほぐすにはゆるめないとけない。そういう感じかな。

通信制での経験は、2回目の生まれ直したたかもれないですね。1回目は洲本高校での経験。僕自身は、自分の中学高校で、勉強が苦痛だとかイヤだということとはなかったんですね。教えられることそのものがイヤだというのは、通信制に来て、わかったことでした。

山下 しかし、それは教員にとっては厳しい問いですよ。通信制は何年まで勤められていたんでしょう。

駒崎 湘南高校の通信制は96年までで、その後、茅ヶ崎高校の定時制に2005年までいました。

山下 通信制にいたあいだ、80年代半ば〜90年代半ばの変化は、どう感じておられましたか。ちょうど通信制高校が、不登校とつながっていく時代ですよ。

駒崎 80年代末から、単位制高校が出てきましたで

しょう。単位はどこで取ってもよくて、取った単位を合わせて、卒業に必要な単位を満たす。それはとても合理的で、学校をバラバラにしてみようわけですね。一方で、逆に通信制を学校化していく流れがありました。スクーリングをたくさんやって、通信制でも学校に来ないと卒業できないような流れができてきた。教えてもらえないと困るというニーズがあって、それを教育委員会が取り込んで、神奈川県でも横浜修悠館高校なんかは、通信制の経験者の教員を集めて学校をつくっていました。

両極というかね。教えてもらいたいという子は、昼間定時制や、新しい通信制に流れていきましたね。それは予想していなかった変化でした。僕らが通信制でやっていたころは、「学校に行かなくてよくなって、せいせいした」という感じだったでしょう。むしろ、自分で自分のやりたいことをしたいという感じで、ある意味、力があつたように思います。自分でできる子がけっこういた。いまは、そうじゃなくて、教えてもらえないと困るといって、通信制でも出席をとったりしている。

脱学校みたいなことを言っておきながら、自分の子どもは学校に行っているじゃないかと言われるのは、なんかイヤだったのね（笑）。

娘は、小学校に入ったころ、「学校って、あんなところだったのか」から始まって、粘土は自分の好きなようにつくりたいのに、丸くしましうとか四角くしましうとか言われてイヤだと、「行きたくない」と言い始めました。3年生の担任の先生がわかってくれる人で、「寝ててもいいから来たら」って言われて、その1年間くらいは行ってたかな。中学はぜんぜん行かなくて、高校は通信制に行ったんだよ。それは、ちよつとうれしかった（笑）。

栗田 そうだったんですね（笑）。

## 何なんだこれは……

栗田 ちょっと話をもどりますけど、私が湘南高校の通信制に入ったころは、転編人が激増していたわけですよ。そのころって、メンタルの問題も増えてきて

栗田 たしかに、私のころは、せいせいした人のほうが多かったですね。

## 娘が学校に行かなくなつて

山下 駒崎さんは、フリースクールなどの動きは、どう見ておられたんでしょう。

駒崎 東京シユーレには、できてまもないころ、1、2回、行ったことがあります。あまりよくは知らないんだけど、当時の印象としては、もうひとつの学校っぽい感じもしていました。僕は、むしろ通信制のほうが、脱学校的だと思ってましたね。

山下 教員をしていることと、脱学校の考えとのあいだに、矛盾や葛藤はあつたんでしょうか。

駒崎 どうでしょうかね。僕の娘も学校に行かなくなつたんですね。それはよかつたと思ったんです。

いる時期だったと思います。そのあたりは、どうでしょう。

駒崎 在日コリアンで、その後、薬物中毒になつてしまひ飛び降り自殺した生徒や、統合失調症で、やはり自殺してしまつた生徒、そして元少年工科学校<sup>\*4</sup>の生徒で、通信制に編入してきて、その後、喘息で亡くなつた生徒もいます。

彼らどうしが学校でもっと直接出会っていたら、その後はちがつていたのではないかと、どうしても僕は思ってしまうのですね。当時、彼らはおたがい直接出会えてはなかつたですからね……。

通信制高校には、いろんな子が来ていましたが、当時は、まだしっかり理解できていかなかったですね。そのころは、「これは何なんだろう。あまり経験ないな」という感じで、「何なんだこれは」と、ずっと思っていました。

\*4 陸上自衛隊少年工科学校…陸上自衛隊武山駐屯地内に所在していた防衛大臣直轄機関のひとつ。2010年、陸上自衛隊高等工科学校に改編された。

最初のころは、大人なり教員がしつかり受けとめて、話を聞いたり、つきあっていたら、なんとかクリアすると思っていたんだけど、どうもそれだけじゃないところ、藤沢に三吉クリニックが開業したんですね。それで、三吉クリニックとの関係から「カフェ・ドゥ・ソーじゃん」という居場所を始めて、そうしたら、そこには学校との関係だけではなくて、生きづらい若い人がたくさん来るようになったんですね。よくわからない世界に、乗りかかった船で、ずるずると引っぱられていく感じでした。

栗田 私三吉クリニックに通っていて、湘南高校の通信制を紹介されたんです。三吉クリニックと出会ったのは、いつでしょう？

駒崎 80年代前半、僕は茅高の卒業生や教員たちと反核運動をしていて、「ばくの会」という名前で活動していたんですね。そこに通信制の子も何人か来てました。山下英三郎さん（本プロジェクトインタビュー#30参照）がやっていた居場所と同じ名前ですが、別

ぶ議論があったんだけど、コーディネーターの若い女性ふたりが、さすがに夜にバイトしながらはキツイよなってね。

山下 通信制高校で会おう子で、学校との関係だけではなくて、しんどい子が出てくるなかで、学校の外にも居場所が必要だということだったんですね。

駒崎 高校生だけじゃないんです。「ソーじゃん」の前に、「ばくの会」で「校害テルテル」という活動をしていたんですね。中学校の前に行って、「教員の体罰や差別がひどかったら電話して」という活動で、市民の集会所を借りて、その電話を利用して、『学校解放新聞\*』の立ち売りとかやってました。そこでつながった人も含めて、「ソーじゃん」を始めたんですね。

山下 なるほど。この立て看、いいですね（写真）。「校則（＝拘束）くそくらえナノダー！」とか「私たち、先

\*5 保坂展人さん（現在は世田谷区長）らが1983年に創刊した新聞。本プロジェクトインタビュー#27参照

団体です（笑）。そこに、クリニック院長の三吉譲さんやケースワーカーの広瀬隆士さんが参加していて、そのなかで、クライアントで来る中高生の話が出てきて、それが「ソーじゃん」につながっていったんです。

## 反学校ではない子どもたち

山下 ソーじゃんは、いつから始めたんでしょう。

駒崎 86〜87年に始めました。大人には雀荘があるけどって、みんなワイワイ「じゃんそう、じゃんそう……」と言っているうちに、「ソーじゃん」って……。そのうえに少ししゃれて「カフェ」ってつけたの。そして戯れに英和辞書をひいて「sojourn」を発見。しばらく滞在するという意味ですね。山下英三郎さんに知らせたら、英ちゃんも共鳴してくれました。ぴったりと（笑）。彼は「ソーじゃん」でなく「さじゃーん」の発音でしたけど（笑）。でも、しばらくやっているうちに、スタッフに給料を出せないというので、91年に障害者の作業所にしたんですね。そのときは、だい

生の着せ替え人形じゃない！」とか。

駒崎 そういうポスターを学校の前だとか、街中のあちこちに貼ってました。



学校解放新聞の立て看（藤沢駅前にて）

**栗田** これは、管理教育からの解放とか、そういう感じですよ。このころは、子どもでこういう活動をしている人もいたんですよ。私は、遠巻きに見ている感じだったんですけど……。

**駒崎** あのころは、おもしろかったんだよね。通信制の子も4〜5人、活動してました。でも、そういう感じじゃない子が来始めたわけです。学校でひどい目に遭ったからとか、そういう感じじゃない子が集まりだした。

**山下** そのへんが不登校と重なる部分があるし、栗田さん自身のこととも重なるわけですね。

**栗田** そうそう、闘うモードじゃないのよ。

**山下** ハッキリと敵が見えていて、それに対して運動する、連帯するというのはなくて、自分でもよくわからない苦しさがあつて、どうしていいかわからない。

て動くようなことがなくなっていますよね。社会問題で、「こんなこと許せない」「これはひどい」という感覚がなくなってきたて、感覚的なところで投げやりというか、70年代半ばから80年代以降、倫理や価値観が劣化しているんじゃないかと思えます。正義なんか関係ない。人々が、やさしさとか自由を追求しなくなった。学校の状況もひどくなっているでしょう。その背景を考えていくと、そのあたりから始まっているような気がします。脱学校というより、みんな脱力してしまっている。こういう状況だと、どこに手を打てばいいのか、正直に言えば、わからないですね……。

**栗田** 大学闘争的なものとか運動的なものと不登校との関係というのも、このプロジェクトで浮かび上がってくるテーマのひとつになってますよね。影のテーマというか。そういうものを、いま、どう捉えるか。

**駒崎** そうねえ……。

**山下** 駒崎さんは、全日制高校から通信制に移って、

もやっとした苦しさがある。そういう「よくわからない感じ」が、だんだん広がっていった……。

そういうなかで、先ほどおっしゃった「学校の軽量化」とか、脱学校論みたいなものも、だんだん通じなくなっていく感じはありましたでしょうか。

**駒崎** うーん、難しいところですね。

**山下** 私もフリースクールに関わっていて、同じような難しさを感じるところがあったんですね。かつては共有できていたものが、だんだん通じなくなっていく感じというか。そのあたりは、なぜなんだろうと思っているのですが。

## 倫理が劣化している？

**駒崎** 70年代の大学闘争がアウトになったあと、どうも日本全体の倫理のレベルが下がった気がするんだよね。他人の状況がどうだろうと関係ない。自分のことじゃなくても、これは何とかしないといけないと思っ

最初はショックを受けたけれども、別の可能性を拓いてきたわけですよ。でも、そーじゃんについては、別の可能性というよりも、より苦しくなってきたと感じていると言えるでしょうか。

**駒崎** 心を病むというかね。そういう人ときあつていると、どこにどう手を打てばいいのか、拓けていくのか、見えない感じですね。

**山下** それは、とても正直な感想なのでしょうね。そこに無理に筋道をつけたり美化してしまうと、実際とズレてしまうのかもしれない。そーじゃあ、いまも活動されているのですか？

**駒崎** 僕も、もう関わりなくなってたんだけど、実は、この3月（2018年）で終わりなんです。作業所になった91年から数えても、27年間、続けてきたんですが、だんだん来る人がいなくなってきましたね。来る人も、発達障害とか統合失調とか診断名がついて、昔とちがつてきた感じになってきたのもあると思います。



山下 よくわからない問題だったのが、医療の問題におさめられてしまったところもあるんでしょね。

栗田 その枠だけが生きのびる術になって、それ以外の枠が衰退していったのかもしれないですね……。つまり結局、医療だけが残っている。

駒崎 医療で命名されると、みんなが納得しちゃうでしょう。そこで、ホッとしちゃう。この人はこういう病気なんだってことでね。

山下 ほんとうは、そのわからなさから考え合っていないといけないんだけど、判断を専門家にあずけてしまいますよね。

栗田 それと倫理の劣化はつながっている気がします。倫理とっていいのかわからないけど。

駒崎 命、かもね。

ついで言えば、全日制の卒業生が影響力を持っていて、定時と通信制はいらないうって、切り離れたんだよね。有名進学校だけの学校にしたいということだね。そういう動きとも並行しているかもしれないですね。

山下 公立の通信制は進学校のなかにあったのが、ほかの都道府県でも別の学校に分けられてきてますよね。

栗田 湘南高校も、通信制や定時制があることで、多様だったと思うんですけどね。

駒崎 最初に話した、公立の小学校にはいろんな子がいたというのと同じで、高校でも、いろんな子と出会って大人になるべきなんだよね。そういうことからいうと、変な状況だよな。

栗田 分断がテーマになってきますよね。そういうなかで、「私」しか見えなくなっている。先生たちも不安定ですし、教員が仲間をつくって声をあげることも難しくなってますね。どう巻き返せるのか、たしか

栗田 命の劣化ですか……。しんどいと、いま生きるだけで精いっぱいになってしまって、目の前のことしか考えられなくなっているかもしれないと思います。だから、他者のことも見えないし、未来のことも考えられない。それは、今となつては私個人にも責任があるように思います。活動とかできない子どもの最先端だったから……。

## どん底まで行ったところから

山下 2000年代以降、通信制高校は構造改革特区で株式会社が参入してきたり、駒崎さんたちが言ってきた「学校の軽量化」とは別の文脈で「自由」になって、営利目的の教育産業の市場になってきたところもありますね。サポート校なんかも、ずいぶん増えました。そういう現状については、どう思っておられますか。

駒崎 僕が通信制にいたのは96年までだったからね。その後は把握できてないんだよね。ただ、湘南高校に

にわからない……。

山下 一方で、べてるの家みたいな動きもありますよね。病んでいることが前提で、そこから共同性をつくっていつている。私たちも当事者研究会を開いてますが、いままでとはちがう共同性も生まれてはきていると思います。逆に言うと、そこまで行くしなくなっているのかもしれないですね。

駒崎 どん底まで行ったところから連帯が始まるのかもしれないですね。

栗田 今日は、とてもなつかしく、インタビューというより、自分が当事者として語ってしまいましたがお会いできてよかったです。ありがとうございました。

本プロジェクトは寄付で運営し、すべての記事が無償で公開しています。  
ご寄付のほど、よろしくお願いします。

郵便振替口座：00100-6-22077

加入者名：全国不登校新聞社

一口 1000 円 / 3000 円 / 5000 円

不登校 50 年証言プロジェクト <http://futoko50.sblo.jp>

#39 駒崎亮太さん

インタビュー日時：2018 年 3 月 21 日

聞き手：栗田隆子、山下耕平

場 所：磯里（神奈川県大磯町）

記事編集・写真撮影：山下耕平

記事公開日：2018 年 5 月 8 日

編集・発行：全国不登校新聞社

© 2018 Zenkoku Futoko Shimbun sha

東京編集局（関東チーム事務局）

〒114-0021 東京都北区岸町 1-9-19

TEL:03-5963-5526 / FAX:03-5963-5527

E-mail:tokyo@futoko.org

大阪通信局（関西チーム事務局）

TEL:050-5883-0462

E-mail:osaka\_c@futoko.org

◇本プロジェクトにおける用語の取り扱いについて  
「不登校」を意味する用語は、長い年月のあいだに、「学校恐怖症 (school phobia)」「登校拒否 (school refusal)」「学校嫌い」「不登校」など、さまざまな用語が使われてきました。立場や人によって、その言葉の使い方や、意味するところが異なります。不登校 50 年証言プロジェクトでは、統一した用語に整理するのではなく、話し手の文脈に即して使うこととします。